
ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

イルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

【Nコード】

N9258Y

【作者名】

イルカ

【あらすじ】

俺はダンジョンを探索する探索家だ。夢はそうだな、もちろん男ならハーレム！それもだ、名声と実績で美女が寄ってくるハーレムだ、わかるか？

しかし問題が色々あるわけ。そう、質の悪いストーカー（美少女）に付きまとわれてるとか、ファミリーの神様が超美男子で女をみんな持っていてっちゃうとか、な。

でもさ、未だ謎とされてるダンジョンの謎を解けば、絶対ハーレム完成だよな。

だから俺は今日もファミリーの仲間とダンジョンに潜る。

似たような話があるところ指摘を受けました。

特に他を意識してる訳ではありませんが、関係者の方にはお詫び申し上げます。

オリジナリティを出せるよう頑張っていきたいと思しますので、しばらく生暖かい目で見て頂けると幸いです。

ブローグ

「前方にオークチーフが2体POP、右からはビッグブラッドバツトが4体。ヤバイ、ヤバイよ囲まれる。」

サポートに徹してるチールが叫ぶ。

しかし前衛の俺とカルシュは今日の前のミノタウロスを相手にするので精一杯だ。

「マーリツシュ、ベルサリア、魔法で迎撃。バックスは足止め、頼むぞ。」

俺はみなに指示を出す但既に連続戦闘時間は1時間近い。そろそろみな、特に女性陣は体力の限界が近づいているだろう。

そろそろ退却を考えるべき時に来てるのかも、と思うが、まだそこまで追い詰められている訳でもなく中々決断できない。

「ダアアアア」

その時、危機に瀕すれば瀕するほど燃え上がるという難儀なスキル持ちのカルシュは一気に気合が入ったのか猛然とミノタウルスに切りかかる。たぶんスキル発動したな。

そのお蔭で長身カルシュの身長もある大剣が、ミノタウルスの堅い筋肉をやすやす切り裂き、右肩付近から右腕を切り飛ばすことに成功した。

ミノタウルスが絶叫と共に仰け反る。チャンス

「我まといしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ」

雷を剣にまわりつかせながら動きの止まったミノタウルスに突進する。

俺の唯一使える魔法、それがこの雷エンチャントだ。

自分の剣にしか使えない、詠唱が長い、持続時間が短い、燃費が悪いと四拍子揃って使いにくいんだが、威力は絶大。

「うおお」

気合一閃、失われた右腕の箇所から一気に胴体を輪切りにする。

ちなみに今の俺ではエンチャントがかかってない状態だと、精々剣が食い込む程度の威力しか出せない。

「カルシュ、オークチーフとビッグブラッドバットに苦戦しているマリーツシュ達の援護に向かうぞ」

「待つてマズイ、後ろでミノタウルスが2体POP中だよ。何とかしないと退路を断たれる！」

再びチールが叫ぶが、その叫びには先ほどよりはるかに危機感がこもっている。

危機がピークに達している現状で、カルシュはすでにミノタウルスへ向けて走り出している。たいして俺はエンチャントの効果時間すでに終了しており、剣にまわりついていた雷は消滅。攻撃力は激減中だ。

いくらカルシュでも単独でミノタウルスを倒しきることは難しい。撤退を成功させることだけを考えねば全滅の危険性もある。

「つく、ミノタウルスは俺が足止めする。チールは魔石とドロップアイテムの回収、それが済みバックスはかく乱魔法、同時に全員退却。14層への階段まで走れ。」

俺は素早く指示をだし、身をひるがえす。

「グオラウウウウ」

直後、ミノタウルスのそれより遥かに大きな雄叫びと共に、ミノタ

ウルスの胸の急所、魔石の部分から巨大な手が生えた。2匹のミノタウルスはあっけなく消滅。
その手が握ったミノタウルスの魔石はすぐさま巨大な口へ運ばれ消えた。

「ら、ラノタウルスだと・・・このタイミングで。」

カルシュが隣で呟く。15層のフロアボスたるラノタウルス。サイのような顔と三本角を持つ巨大な人型モンスター。そう俺たちがこの場所で1時間も狩りを続けていたのは、こいつを待っていたからだ。

しかし、これはタイミングが最悪。みな疲弊しておりオークチーフなど、雑魚とは呼べないレベルのモンスターを相手にした状態。ミノタウルスを一撃でぶち抜くこの怪物と戦えるだけの余力は到底持っていない。

不味い、ホントマズイ。これは、ヤバイって。

「全員即座に退却。走れ。」

もうアイテムとか魔石とかそんなものはどうでもいい。このままじゃアレが来る。そしてまた取り返しが・・・

「はあい。オイタはいけませんよー。私”を”愛する人に近づくなんて最低ですねー。」

場違いな甘い猫なで声。

と、同時にラノタウルスの体を幾筋もの銀光が通り抜ける。

「グオ？」

間抜けな声。そしてフロアボスたるラノタウルスは振り返る事すらなく、あっけなく解体された。

「はあい。私”を”愛するマイダーリン。無事？」

その女は軽やかにステップを踏みながら、俺たちが散々苦戦してい

たモンスターを一瞬で解体していく。

流石は現在、最強の一角とみなされる女剣士だ。この華奢に見える体にどれほどの力を内包しているのだろうか。

しかし、

「やっぱりもう来たのかよ・・・まあ助かった・・・けどよ」
俺の疲れたため息が15層のフロアに染み込んでいった。

ブローグ（後書き）

初投稿作品です。見づらい所も多々出てくると思いますが、都度修正したいと思しますのでよろしく願います。

名前がおかしかったので修正
カール カルシュ

第一話

3時間かけてダンジョン15層から地上まで戻った俺達は入り口でいったん解散した。

俺とチールは探索ギルドへ、他のメンバーはファミリーのホームへ戻り先にステータスの更新だ。

まあ、俺として疲れきって（主に精神的に）いたのでホームへ戻りたかったのだが、ギルドの依頼を受けていた以上、ファミリーリーダーとして真つ先に報告する義務があるのだった。

ダンジョンの1層入り口からわずか30歩、重厚な石積み の2階建ての建物、表には両手剣に竜の牙を型どった意匠が施された木製扉。まるでダンジョンから街を守るような佇まい、それが探索ギルドだ。

「うーす。」

俺はその木製扉を空けつつ適当な挨拶をした。

中にいるのはむさいヒューマンのオッサンが4割、ゴツイお姉さまが1割、竜人族・獣人族・精霊族で5割といった感じだが、その大半がこちらをチラッと見ただけで興味を失ったように視線を戻す。

俺たちのファミリーはまだまだ無名だからな。

「お、グランディラファミリーじゃねえか、お前らラノタウルスの討伐受けたんだってな。どうだうまく行ったのか？」

「あの面見たら失敗だって分かるだろ。きっとまたストークマスタークイーンに助けられたんだぜ。」

「ギャハハ、ちげえねえ。ボーヤも大変だわな『追跡の剣姫』に愛されて、ギャハハハハ。」

前言撤回、俺たちのファミリー（というか主に俺）は意外と有名で

ある。実力とは別の所で。

俺はこの手合いは無視することにしてる。相手にしても良い事って何もないからな。

真っ直ぐカウンターに向かい、空いていた席に座る。

「探索ギルドへようこそ、どのようなご用件ですか？」

ギルドの受付は全員女性だ。名前は覚えてないけどな。

え？ハーレム作りたいなら女性の名前ぐらい覚えるべきだろうって？ハーレム要員じゃない女んでどうでもいいんだよ。

「依頼の報告に来了。ラノタウルの討伐、それとモンスターカラのドロップ品だ。」

そう言っただけは依頼書を懐から取り出す。隣ではチールが道具袋から魔石とアイテムを幾つか取り出している。

「確認致しますので少々お待ち下さい。」

そう言っただけアイテムをまとめて受付嬢は裏に下がる。

それを待ってたように一人の妖精族の女性が声をかけてきた。

「やあ、ラノタウルス討伐に行ってたんだって？今の様子だとうまく倒せたみたいだな。おめでとう。あれはフロアボスとしてもかなり強い方だと言う事はよく知っているよ。私もあれの討伐に行ったことがあるからねえ。」

そう言っただけ声をかけて来たのは妖精族のミリテットだった。相変わらず派手な羽を持った細い女だ。いやここまで細いと骨だな、うん。俺基準で60点。俺はもっとうる肉付きが良くて、ほらこう腰かお尻の辺りが艶かしくないと、わかるな？

ちなみに顔は80点である。頬肉が足りない。

俺があまりに全身を上から下までジロジロ観察したからだろう

「相変わらず君は無遠慮だよ。そんな目で私を見るのは君ぐらいだよ。」

ミリテットなどとは苦笑しながら、それでも隣に椅子を持ってくる。

「こ、これは『銀羽の天女』様。うわあ、間近で初めて見ました。ほ、本当にお綺麗で、です！」

ああ、私は獣人族のチール。グランディラファミリーのサポートです。よ、よ、よろえ。」

「噛みすぎだ。全く、なんでこんな派手羽女に緊張するんだか。」舌を出してハアハアしてるちよつと変態ばいチールの姿（舌を噛んで相当痛かったらしい）を呆れながら俺は見る。

「私の事を派手羽女とかいうのは君ぐらいだよ。全く非常識なのは君さ。まあ今はそんな事どうでも良くてだね、ラノタウルスどうだったのさ？」

「じゃあ、派手羽&骨女でどうよ？ラノタウルスは、なんだ一瞬だったよ。超弱かった・・・うん、銀線がシュパシュパとなってバラバラだな。」

どうだ、俺の的確な表現。分かりやすkarうて。

「なんだ、またミルちゃん来たのかい。ホントあの子もマメよねえ。世にも珍しい彼女のユニークスキル有効活用とも言えるけどさ。」

なんでこんな・・・まあ、顔は悪くないが、女を”褒める事”、ホント”褒める事も”出来ない、非紳士がいいんだか。となりのチールって子の方がよほど可愛い男だよ」

2回言いやがった。どうやら俺の論評はお気に召さなかったらしい。しかし、二十歳の男に対して可愛いって褒め言葉か？

なんかチールは喜んでるようだ。まあ獣人族は総じて可愛い種族ではあるな。耳と尻尾だし。

「分かったらあっち行つてろよ。えと『銀羽の天女』様？ッ」
「なぜ笑うかな、ホント失礼だね君は。神が付けたセカンドネーム
を笑う奴は、か、加護を失うんだぞ！ホントだぞ」

第一話（後書き）

主人公はバカ系です。一応ファミリリーリーダーです。でも馬鹿です。設定ちょっとだけ解説。

この世界では神様が普通暮らしていて、ファミリリーというものを作ります。

小規模ギルドみたいなものですね。

神様1人に1ファミリリー、人数はピンきりです。

神様は自分のファミリリーのメンバーにセカンドネーム付与とステータス更新を行えます。

あ、主人公の名前が出てなかった。多分、次ぐらいで出てきますまだ神様出てこないかもしれません。

第二話

えっと、俺の目的なんだっけ？少なくともこの派手羽女の相手ではない。

「はっ、うちの神様はそんな事で加護取り上げたりしねえよ。お前の所の神様は胸小っちゃいけどな。」

が、言われたら言い返すに決まっているだろ。それが世の中の摂理ってもんなのだよ。

「む、胸とか関係ないだろう、この変態が。ほんと君は人間的にダメだな。ホントダメだ。」

なぜか自分の胸の辺りを両手で隠しながら、”ホント”と”ダメ”を連発する派手羽女。こいつバカだよな、間違いない。でもムカつく、派手羽をビヨンビヨンしたくなる。

「お待たせいたしました。グランディラファミリーのカリキ様、ラノタウルの報酬3万ギルダ、魔石・アイテムの換金が1万2千ギルダになります。ご確認ください。」

俺がどうしてやるか若干悩みつつ両手をワキワキしてる所へギルドの受付嬢が戻ってきた。

ふむ、思ったよりも換金が高い、ラノタウルのドロップもあつたからか。倒したの俺たちじゃないけど。

「ありがと、ありがと。さてチール帰るか。」

俺は現金袋をひよいと持ち上げるチールに声をかけた。

「は、はい。それでは『銀羽の天女』様、失礼します。」

あれ、こいつまだ居たの？

「今のタイミングでムシなのか？ホントこのバカは、マジバカだから。」

なんかブツブツ言ってるようだが放置した方が良さだろう。羽派手女の相手は時間の無駄である。

「じゃあな、派手羽。」

俺は一応別れの挨拶をして出口へ向かう。

「ああー、もう。いちいちムカつくんだけど、分かったわよ。またね。」

そんな声を背後に俺とチールは探索ギルドを後にした、いや、しようとした。

「はあい。私”を”愛するマイダーリン、お疲れ様。丁度いいタイミングだった？あなたはこれから暇でしょうから、私が食事でも付き合っただけでいいわよ？」

いかにも偶然のように（待ち構えてたのは間違いないが）ひょっこり俺たちの前に現れたのは、15層でラノタウルスを瞬殺した女剣士『追跡の剣姫』ことミラヴィルチェアだ。

竜人族の特徴である頭に2本と両肘に生えた角がダンジョンから出た後も凛々しさを際立たせている。

ちなみに顔は90点、若干目尻が釣り上がりすぎだと思っただわ。体付きは40点、なんつうか竜人族って苦手なんだわ。トータル興味外、残念でした。

「あー、ミラヴィルチェア。これが今回の討伐報酬の半分。一応手伝ってもらったしな渡しておく。」

俺はそう言っで、1万5千ギルダを袋から取り出し（1万ギルダコインと5千ギルダコインが1枚づつとお手軽だった）渡そうとする。

「私”を”愛するマイダーリンはそんな事にまで気を使ってくれるなんて。ほんと優しいのよね。でも大丈夫、それは『あ・な・た』のファミリーで使っでちょうだい。うちには必要ないから。」

別に俺は優しさで言ってるんじゃないやなくて借りを作りたいだけだ。そつでなくても毎回毎回・・・

「あ、でもでも、どうしてもって言うならあ、食事付き合ってあげるからご馳走してくれてもいいのよ？」

このパターンだからな。

「いやいや、今日はこの後ファミリーホームに戻ってステ更新とか色々忙しいんだよ。だから報酬受け取れや、な？」

「あらあら、ダーリンはどうしても私と食事行きたいのに、今日はダメで落ち込んでるの？なら仕方ないわね、明日時間作ってあげても構わなくてよ。」

誰もそんな事言っていない。その誘い方に落ち込むからやめれ。

「じゃあ、明日お昼の時に中央広場で待ち合わせね。じゃ、私”を愛するマイダーリン、それまで寂しいと思うけど、今日はお別れね。」

一方的に言い残して、ミラヴィルチェアは俺の目の前から一瞬で消えた。どうせ近くに隠れてこっちを観察してるんだが。そして明日は待ち合わせと言いつつ、日の出ぐらいからファミリーホームのドアの前で待ち構えているに違いない。最悪最凶の女である。

マジ怖いけど、この街でも最強の一角（個人）&最強の一角であるファミリーあの子を下手に刺激してもあまり面白いことにならない。

経験って大事だ。えーと、たぶん10回ぐらいの経験（ちなみに30回以上は経験してる）

「はあ、疲れたな。とつとと帰ろう、チール。」

「ははは、いつも大変っすね。でも、銀羽の天女様、マジ可愛かったなあ。僕もファンクラブ入っちゃおうかなあ。」

この世界はバカばかりである。俺以外。

第二話（後書き）

普人族・・・いわゆるヒューマンタイプ

竜人族・・・頭と肘に角が生えている種族、肌の色は茶色、極薄い緑
獣人族・・・動物耳と尻尾は生えてる、種類は既存哺乳類ならほぼ
網羅されている

妖精族・・・外見ほぼヒューマンだが背中に羽が浮いている（生えているのではない）耳が若干尖っている個体も

基礎身体能力的には妖精族が飛べるぐらいで、種族差はあまりない
（個人差は大きい）

スキルや魔法は種族ごとに多少偏りがある（絶対ではない）

今回は神様登場、ファミリーホームも、後はスキルとか？

誤字脱字などありましたら都度修正していきます。
指摘・感想などもお待ちしてます。

第三話

「やれやれ、毎度毎度ホームが遠いのはなんでだろうな。」

「ははは、実際遠いですからね。」

探索ギルドから疾走を初めてそろそろ20分。ようやく道程の2/3を消化した所だ。ちなみにホームはダンジョンから普通の人が徒歩で3時間（20キロ）ほどの距離にある。あれ馬車使ったほうが良くな？

「やれやれ、馬車でも買ったほうがいいな。」

「はは、馬車だと10分ぐらいですからね。ただ馬の世話は大変ですよ。」

そう、生き物は放置しておく訳にはいかない、世話をする必要があるのだ。特に馬は繊細だ、放置するとすぐに体調を崩すからな。

そんな事をグダグダ話しながらホームまでの道程を走りきった。

「やあやあ、ようやくついた。愛しのマイホームよ。ちょっとボロいけどな。」

「それ言っちゃダメですって。とりあえず入ってくつろぎましょう。」

石積みの堅牢だがちょっとボロつちい家にチールがテクテク入っていく。俺はチラッと後ろを見てからその後に続いた。

「おう、おかえりだ。意外と時間がかかったんだな。」

中から真つ先に中性的で魅力的な声がかかった。

「ただいま、神様。そして3日ぶりのマイホーム。」

「いいから、玄関先で叫んでないで入ってきな。君ら二人以外はもうステータス更新終わってるしさ。」

ステータスというのは自分の器に溜まった魔水（人は魔石モンスターを倒すとそこから漏れる魔力を液体にして体内にため込む性質が

ある）に神様の神力を混ぜて能力化し肉体に還元した結果を数値化したもののことだ。

それを神様はカードに書き起こしてくれる。ステータス更新はどうやるかというと背中から手をつ込んで中をコネコネされてる感だ。この行為を一般的には”ステータスを練り込む”と言う、一人10分程度。

「俺たちは”ばとるでーたー”を引き出しといて再生して楽しむついで、その褒美さ。」

との事で無償ではないらしい。が別に慣れてるし気にしていない。害ないしな。

まあ神様は超男前もしくは絶世の美女が大半、しかも多くが博愛主義（？）と最悪なので実害は多いにある、のだが・・・

「グランディラ様、先に僕のステータス更新して貰ってもいいでしょうか？」

チールは神妙な顔付きで俺に遠慮するようにおずおずと言った。

「いんじゃないかな、リーダーは最後で。ほらおいで可愛がつてやるから。」

ちなみにこの超男前で中性的なグランディラという神様は男女どちらも対応可能である。

するなよ、という突っ込みは全く効果がない。このファミリー全員・・・いやなんでもない。

まあ嫌がる奴（俺とか）は何もないけどな。ないけどな！記憶もないけどな！！

ふう目から変な汗が出てきたぜ。

「ふっふっふーん、っはっははぁーん」

早く防音室のあるホームへ移動したい。マジホントニ。

「たらつらららんーん。チールはランクが上がった。」

突如、神様が大声を出した。

「っは?」「マジで!?!」「やった。」「おー」

誰が誰の反応でも別に構わないが、当たり前前の反応というよりは薄めだな。

ランクアップこれは一大イベントだ。

「神様、ホントですか、ホントにホントですか?」

「神様は嘘つけないんだよ。禁止条項だからね。ステータス書き起こすから少し待ちなつて。」

名称：チール 鍛冶っ子ちゅーちゃん

ランク：E D

力：4 8 4

体力：3 3 3

賢さ：5 3 5

器用さ：7 8 8

幸運：9 0 9

スキル：なし 抽鍊鍛冶士Lv1

鍛冶士の能力と共にEクラス魔石金属の生成を行う事が可能

魔法：なし

「はい、これが君の更新カードね。ちゅーちゃんって可愛くね?可愛いよね?らぶー」

らぶー、じゃねえよ。この変態神様めが。

「やった、本当に上がってる。え、しかもレアスキル!?本当に?鍛冶士のレアって中々いないんですよね?ほんとー、凄い嬉しい。グランディラ様凄い、大好きですー。」

「注1：ステータスはどの神様が更新しても同じ結果が出るんで

すよ。」

横でボソッと呟いたのはマーリッシュだ。この顔は後輩にレアスキルが発現したんで悔しいんだな。

「まあまあ、ついにうちのファミリィにも鍛冶士のスキル持ちが出たんだ。まずそれを喜ぼうぜ。期待してたとはいえ狙って発現させたんだしな。」

スキルは個々の適正・特性・願望がなんたらで、ランクアップすることによって1つ発現する。

狙って発現する事は少ない（願望はあっても適正と特性がないと別の物になる）

からな。

魔法はランクに関係なく突如使えるようになる事が多い。こっちは性格に依存しているらしい。生涯通じて使えない人が最も多く、2つまで覚える可能性がある。

俺はスキル1つに魔法1つだ。

さて、次は俺のステータス更新だな。そろそろランク上がらないだろうか。

第三話（後書き）

ステータスはランク毎に0～100で表されます。

ランクアップは必要な数値というのではなく、個々において何かブレイクスルーがあつた時に上昇します。

チール君の場合はラノタウルスの魔石を取り出した事がキッカケ。ランクが上がると各数値はほぼ1/10になりますが無能力的には大幅に上昇しています。

次回、主人公のステータスとセカンドネーム公開予定
ストーカー（美少女）とダンジョンの出番がないな・・・
バイな神様は次回も活躍？

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第四話

「ざーんねーんでしたー、まーたどーぞー。」
うるさい、変態神様。

ああ、ステータス更新が終わったんだが、あまり大きな変化がなければこう言ってくるたちが悪い神様だ。

俺は渡されたカードをマジマジと（というほどでもないが）見る

名称：カリキ 脳筋の鏡

ランク：D

力：3 8 3 9

体力：5 2 5 4

賢さ：3 3

器用さ：1 5 1 5

幸運：6 7 6 8

スキル：鋼鉄化Lv3

全身の筋肉を鋼と同質に変化させる（戦闘時）

魔法：雷エンチャントLv2 『我まといしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ』

自分の武器に雷の刃を纏わせる。効果時間3秒（賢さによって効果時間増減）

確かに残念である。15層であれだけ激闘を繰り広げた結果がこれでは少々辛い。

肝心の奴を、あれに取られたからだ。あれのせいだ、そうだな。うんその通りに違いない。

「やっぱ、15層がそろそろ無理じゃね？次は16層に行こうぜ。」

チールもランクアップしたし装備整えて行けば大丈夫っしょ。」

と、カルシュ。ミノタウルの腕をぶち切ったので自信を付けたな。

「えー、今回もかなり危ない所だったし、装備整えてもう一度ラノタウルスに挑戦した方が良い気がするわよ？」

とは、ベルサリア。慎重な彼女らしい意見だ。

俺はカルシュの意見に賛成だけどな。そろそろミノタウルス飽きた。

「まあまあ、それは装備整えてから考えよう。所でカリキ、今回の報酬は？」

いつもまとめ役はバックス。俺がリーダーなんだが、適材適所おかしい事は何も無い。

「あー、ちゃんと貰ったぞ。いくらだったけ・・・忘れた。チール頼むわ。」

面倒なことは覚ええないのが俺の主義だ。誰も文句言わないから問題もない。

「はい、今回の報酬はラノタウルの討伐報酬3万ギルダ、換金が1万2千ギルダでした。スキルの有効活用で魔石は置いておくべきだったかもしれません。もう少し早く覚えていれば・・・」

「ははん、カリキ君、また渡せなかつたんですね。で、明日は剣姫とデートかあ、羨ましい。彼女も味見したいんですけど、せっかくだからここに呼びませんか？」

「俺は呼んでもいいが、切られると思うぞ。神様？」

あれでも彼女は身持ちが固いのだ、たぶんだけどな。ん？俺がなぜ擁護しなければならんだ。

「はっはは、切られるのは勘弁ですね。死にませんけど不死だけど痛いのですよ。切られたことありませんけど、あっはっは。」

うるさいぜ、全く。まあ神様は不老不死なのだ。

このグランディラ神はこの世界”リヨウシサーバー：エデン”に降り立ってまだ日が浅い新米神様だが、ミラヴィルチェアが所属しているイリノファミリーのイリア神は1万年以上前からこの地に実在している原初の5柱神の1柱だ。

これ以上詳しい話は良く知らないんだがな。聞いたことはある気もするが忘れた。

それに1万年ってどのぐらいだ？さっぱり分からん。

「それじゃ、明日はリーダー不在って事で、他のメンバーは買い出しだな。装備全部新調するのは難しいだろうが、魔石と鉱石を3万ギルダ分買ってチールに加工させてみる方向で。カリキ、問題はなにか？」

バックスが聞いてくるが、なぜ俺に聞くんだ？

「任せる、考えるの面倒だ。」

つぶ、これぞリーダーの資質。必要なことは出来る奴に任せればいい。

なぜみんな半笑いなんだ、面白い事でもあったか？

「よし、方針も決まったし食事しようか。今日はカニチャーハンに八宝菜、メイン肉はグラディロサウルスの胸肉醤油仕込み、後はミソスープだぞ。」

俺たちがホームで食事をする時は神様作る。こんな変態神様だが料理の腕が神クラス。いや神だが。

聞いた話だと、神様がみんな料理する訳ではないらしい。大抵見習いのEランクが作ってるそうだ。マズくね？

『我らが神と糧と生に感謝を、いただきます』

大皿に盛られて出てくる料理を小皿に分けつつ片っ端から食べまくる。

神様が作った料理といえども、食費は自分たちで稼いでいるわけだから遠慮する必要など何一つ無いのだ。

ちなみにファミリー6人と神様の7人で1食は約10ギルダ、これは一般6人家族の3日分ぐらいに相当するが、ダンジョンに潜る探検者のファミリー稼ぎからしたら全く大したことはない。

おっと、訳のわからない解説などしてる間に小皿が空になってしまった。

「あ、ちよつと、そこ取らないでよ。私のだよ。」
そんな事は知らん、俺が食う。

「注1：バカカリキは少し遠慮すべき。そうでなくてもストーカー女のせいで迷惑。」
それも知らん、オレのせいではない。だから俺が食う。

「ふふ、いつも賑やかでいいですね。あ、チール君、夜は私のベツトに、ね。ランクアップのお祝いを二人つきりでしましょう。」

チール顔真つ赤だな、やめろ。マジで、そんな会話すら誰もいない所でやれ、変態神様が。

「注1：興味深い、私観察してもいい？」
マーリツシュややめておけ、見たら目が腐るぞ。

「あーあ、私を熱く溶かしてくれる人はいないのかしら。残念だわ。」

溶かす前に凍らせるのが悪いと思うぞ、ベルサリア。チラっとかこつちを見るな、俺は二度とお前の相手はしない。

よし、もう周りなんて気にせず食おう、食うぞー。

+++++

+++++++;

グランディラファミリーのステータス

名称：カリキ 脳筋の鏡

ランク：D

力：39

体力：54

賢さ：3

器用さ：15

幸運：68

スキル：鋼鉄化Lv3

全身の筋肉を鋼と同質に変化させる（戦闘時、体力の続く限り）

魔法：雷エンチャントLv2『我まといしは魔を切り裂く光の雷。

剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ』

自分の武器に雷の刃を纏わせる。効果時間3秒（賢さによって効果時間増減、Lvにより切れ味増大）

名称：バックス 作意の匠

ランク：D

力：23

体力：20

賢さ：32

器用さ：25

幸運：15

スキル：魔力錯乱Lv2

視界内にいるモンスターの魔力器官を一時的に混乱させる（1個体1度のみ有効、Lv以上のモンスターには効果無効）

魔法：蒸散霧『水に宿りし精霊よ、その姿を熱し現したまへ』

指定領域周辺の水分を瞬間的に蒸発させ霧状し視界を遮る。効果

時間3.2秒（賢さによって効果時間増減）

名称：カルシュ 危機は上等

ランク：D

力：5.2

体力：4.0

賢さ：2

器用さ：3.7

幸運：1.9

スキル：危機一擲Lv4

危機になるほど力が上昇する（Lv以下のモンスターに対し先読みが付与される）

魔法：なし

名称：マーリツシュ 無情なる乙女

ランク：D

力：8

体力：1.4

賢さ：4.7

器用さ：1.2

幸運：3.3

スキル：視線無視

モンスターから見えなくなる（常時）

魔法：爆裂炎上Lv2 『敵対する者に無慈悲なる赤き裁きを』

モンスターの魔力を暴走させ炎上爆発させる（賢さによって威力増減、Lv以上のモンスターには効果無効）

名称：ベルサリア 凍の癒姫

ランク：D

力：14

体力：21

賢さ：51

器用さ：32

幸運：2

スキル：氷結快癒Lv3

右手で触れた部分を氷結させ、その後徐々に再生する（賢さによって効果増減、Lv以上の人には効果無効）

魔法：凍結散華Lv2『卑しき者に冷たき制裁を、愚かな者に無慈悲な結果を、祖は暗く冷たき場所へ至れり』

視界範囲の温度を急下降させモンスターの魔力器官を停止、破壊する（賢さによって威力増減、Lv以上のモンスターには効果無効）

名称：チール 鍛冶っ子ちゅーちゃん

ランク：D

力：4

体力：3

賢さ：5

器用さ：8

幸運：9

スキル：抽鍊鍛冶士Lv1

鍛冶士の能力と共にEクラス魔石金属の生成を行う事が可能（Lvにより扱える魔石金属のクラスが変化）

魔法：なし

第四話（後書き）

スキルや魔法にはレベルが設定されているのは特定の場所（鍛冶系統以外はダンジョン）専用です。

されていないものは生物やモンスターに直接作用しない代わりにどこでも発動します。

ベルサリアがああ時に相手を凍らせるのは別の方法（？）
気にしない方向でw

次回、あのストーカー（美少女）大活躍
ダンジョンも出ます

バイな神様は出てきません

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第五話　「追跡の剣姫」の日常 その1

私はこっそり分かるようにダーリンがホームに入るのを見届けた後、来る時の倍速で一氣に街へ戻る。

ほんと、全くいつも世話がかかるわね！それがまたちょっと可愛いと思うし、時々は凄く格好良いし、それに私を愛してくれる美男子だし……

おっと彼のいい所なんて考えだすと日付が変わっちゃうわ。

私は走りながら懷から通信石を取り出して呼びかけた。

「ポーリ、聞こえる？」

「はいはい、聞こえておりますよ。剣姫さま。そろそろ行かれますかな？」

「ええ、10分後に来て頂戴。」

「了解致しました、剣姫さま。」

簡単な会話で通信を終わる。サポーターのポーリとは付き合いが長い、阿吽の呼吸ってやつね。

再びダーリンの事を考えていたら、あっという間にダンジョン入り口までたどり着いた。

すでに渋い中年の大柄な獣人が入り口横に控えているのを見て少し、笑みをこぼす。

「ポーリ、ごめんなさいね。いつも面倒かけるわ。」

「お気になさらずに、剣姫さま。あなた様の専属であることを誇りに思っておりますゆえ。」

常に口調が堅苦しいのがマイナスだけどね。

「そ、そう？ありがと。あーと……準備に問題なければ行きまし

ようか。」

「問題ございません。参りましょう。」

頷くと1層に入った所で、お互い道具袋から転移石を取り出し発動させる。

転移石は双子石で、自身の片割れとなる石をダンジョン内に置いておけば、その場所まで一瞬で移動出来る便利なものだ。

使用者にしか効果がない上に使い捨てだし、フロアボスの特殊な魔石からしか作ることが出来ないためとてつもなく高価なので中級探索者には手が出ないけどね。

そうね、ん、今日ダーリンが稼いだギルダだと2個買うことはできないわね。

そんな思考の間に私たちは41層へ繋がる階段エリアに移動した。各層をつなぐ階段エリアはダンジョン内で数少ない安全普遍の場所だ。ここには何故かモンスターは侵入できないので、探索者は適性層の階段付近で戦いを繰り広げる事が多い、危なくなったら逃げこむ事で事故が格段に減るってわけ。

まあ、この41層なら私にとっては大した敵は出てこないけどね。

「あら、なんか人が多いわね。どこか大手ファミリーが遠征でもやってるのかしら？」

私は階段を下りて行こうとして、えっと、ざっと50人ぐらいの探索者集団に出くわした。

ダンジョンは下層になるほど広くなり敵の数も増えるので、適正階層で戦うならこの人数が極端に多いという訳じゃ無いけど、人数が増えれば分け前は減る。

って理屈で少し浅い階層を少ない人数で探索する事が主流なのにな。

ん、と私が可愛く考えていると、ポーリが私に一礼して探索者の

集団に近づいて行った。ホント良くできた人だね。

「失礼いたします、皆様。わたくし”イリアファミリー”のサポーター兼錬鉱石士しておりますBランクのポーリと申します。」

そういつて今度は探索者の集団に一部の間もない挨拶を行うポーリ。セカンドネームは自分から名乗らないのが慣例だしね。

「皆様、本日はどのような要件でこの層にいらっしゃるのですか？ 場合によって、私もは層を変えますので、よろしければお聞きかせ頂けませんでしょうか？」

そこまで言つと丁寧というより慇懃無礼だね。私は思わず苦笑してしまう。

「げ、追跡の剣姫」

「え、どこどこ？ふわあ、あの人ですか。憧れの剣姫様、ああなんと美しい。」

「マジ？（チラッ）おー、ホントだ噂通りの美少女じゃん。あれがストークマスタークイーンか、勿体ねえ。」

「ちょっと、私、その呼び方好きじゃありません。やめて頂けます？」

イリアが付けてくれた”追跡の剣姫”は響きもいいし大好きだけど、この変な呼び方は大嫌い！

「ひい」

あ、いえ、そこまで怯えなくても。少々傷つく所よね、興味ないけど。

「あ、ああ、これはすみません。不作法な奴でして。ほら謝れ。」
集団のリーダーらしき龍人族の男が一步前に出て、無礼な奴の頭を押さえつける。

「いえ、分かって頂けたのなら問題ありませんわ。」

「ありがとうございます。おっと挨拶が遅れました。タツキファミ

リーのリーダーをやっております、Bランクのセルリーンです。お見知りおきを。」

「して？」

ポーリは私の方をじつと見ながら返礼してきたセルリーンの視線をさり気なく遮るように立ち、続きを促す。ナイスよ。

「我々タツキファミリーは、現在この41層フロアボス”キュバスオロチ”の討伐依頼を受けております。後2時間ほどで出るはず。今から所定位置まで移動しますので、そちらの狩りの邪魔にはならないかと思えますよ。」

「なるほど左様でございましたか。それはそれは、こちらも邪魔にならないよう気を付けさせていただきます。」

ふーん、もう前回討伐から41日経ったのか。早いわねえ。

ま、私には関係ないけどさ。今の私の目的は近々（といっても数か月先だけど）ある大遠征に備えて、この層のモンスターが落とすところあるレアドロップアイテムを手に入れる事だ。

ホント、中々でなくて嫌になっちゃう。

「それじゃポーリ。こちらはこちらで邪魔にならないように始めましょうか。」

タツキファミリーの集団に対して興味を失った私は狩りを始めるのだった。

第五話　「追跡の剣姫」の日常　その1（後書き）

フロアボスはダンジョンの各層に1匹いるボスモンスターです。

ポップ間隔が決まっており討伐後その階層の数字（15層のラノタウルスは15日後、41層なら41日）経つと出現します。

フロアボスの魔石は転送石の素材となる貴重な物のため、探索ギルドが日程を管理して魔石に報酬をかけて討伐依頼を出しています。

次回、ヒロイン無双、ステータスも公開

バイな神様は出てきません

主人公は・・・名前だけ？

ごめんなさい、1話で終わらなかったんです。

完結する予定だったので・・・

更新は書けた時に、ということ結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第六話　「追跡の剣姫」の日常　その2

タツキファミリーと別れて2時間ほど経過した。私はフロアボスのポップポイントから2フロアほど離れた場所で狩り中。

この層ぐらいになるとペアで狩りする場合、階段から離れないのがセオリーなんですけど、私からすればどこで狩りをしても特に問題ないんですよ。

「右からゴーズコンドル3匹、来ますぞ。」

ポリーが魔石を回収しつつ私に警告した。

ティラヒュドラ2匹相手にしている私はその報告を冷静に聞く。さすが集団クラスのファミリーが狩りをしてる層はリポップが早い。

私は両手に持っていた剣を左手の片手持ちにするとその剣でティラヒュドラの首を一つずつ飛ばしながら、

『我の詩に酔いなさい、刻の調べに狂いなさい、さあ汝、全なる我に従うべし』

右手をゴーズコンドルに向けて魔法を唱える。

魔法が発動した、その瞬間に衝撃波を伴うほどの速度で特攻してきていたゴーズコンドルは3匹とも空中で急停止する。

それを確認することなく、右手をまだ無傷のティラヒュドラに向かって振るう。

するとゴーズコンドルが弾かれたように向きを変えティラヒュドラへ突っ込んでいく。

それを横目にもう一つ首を刈り取った。

ズドッドッドオオオン

無傷だったティラヒュドラの3つの首それぞれにゴースコンドルが衝突し爆発が起こる。

同時に自由になった右手を剣に添え、もう一匹の残りが一つになった首を切り落とした。

「さて、今度は出るかしらね？ポリーお願い。」

「はい、ただいま。」

私たちの狙いはティラヒュドラのレアドロップアイテムなのだけど、これがホントに出ない。

まあ元々3つの首からそれぞれ別のブレス（スキル認定らしい）を吐くヒュドラ系はアイテムを落とさないので有名だ。

『体内で相反する属性を生成するから出来にくいんじゃない？』
とはイリア神の言だけど、1万年以上、人はダンジョンでモンスターと戦ってきたのに、その生体はほとんど解明されてないのよね。
ホント謎が多い。

「剣姫さま、ダメですな。魔石のみです。」

ティラヒュドラとゴースコンドルの遺骸をほじくっていたポリーが淡々とした声で報告してきた。

ホント嫌になっちゃうわね、いつになったら出るのよ『氷炎の凱骨』は。

ここ10日で200匹近く倒してるっていうのに、うーう、もう！
ポリーはラック高いに出ないのは、私が低いからかなあ、ちよつと落ち込んできちゃう。

「剣姫さまのステータスは関係ございませんよ。サポーターである私の責任です。面目次第もございません。」

サポーターは戦闘力が低い代わりに、ラックや器用さが高く、モン

スターの遺骸から魔石やアイテムを取り出す事を主な仕事としている。

なにせ魔石をとり出さなければ遺骸は数分間に渡ってその場に残り続けるから。

モンスターの戦闘中に足捌きの邪魔になろうものなら、それだけで致命的なことになりかねないからね。

いくら私でもサポーターなしで戦闘しようという気にはならない。

「いいえ、仕方ないことですね。少し休憩しましょうか。そろそろフロアボスが出る時間のようですし。」

ともかく、何故わざわざタツキファミリーかと付かず離れずの場所で狩りをしてるかと言いますとポーリの一言がキツカケ。

「剣姫さま、彼らの討伐はおそらく失敗するでしょう。階段付近では撤退に巻き込まれるかもしれません、留意して頂けますようお願い申し上げます。」

という感じ。”キュバスオロチ”はフロアボスとして特別強いという訳じゃなかったと思うのだけど、ポーリの忠告は聞いておくに限るのよ。

ラックより第六感に優れてるのかしら？

そうこうしてる間に、床から微弱な振動が伝わってきた。フロアボスが現れる時に感じる魔振ですね、来るようです。

邪魔する気はありませんけど一応様子みてみようかな。

「ポーリ、もうワンブロック移動して彼らを視界に入れます。付いて来なさい。」

「了解致しました、剣姫さま。」

途中のモンスターを排除しつつ見える位置まで移動していた頃には、タツキファミリーとキュバスオロチの激闘が開始されていた。

第41層（Bランクフロア）フロアボス”キュバスオロチ（認定Lv5）”

初期全長約34m、8つの首と6本の尾を持ち4種のスキルと2種の魔法を扱う

特に生気を吸い取り自身を回復する範囲魔法が強力。

また認定Lv5はBランク探索者の持つスキルや魔法のほぼ半分が無効化されてしまう（BランクでLv6に到達する魔法やスキルが少ないため）

まさに化物である。

最初はタツキファミリーが優勢だった。

50人規模のメンバーをうまく振り分け、自由に動く首と尾に対応しながら魔法を使う暇も与えずダメージを与えていた。

特にリーダーセルリンがいる集団は動きがよく、ついに首を1つ切り落とす事に成功する。

が、そこから状況が一変。キュバスオロチが怒ったのか、突如として尾から電撃を発し、残ってる首は炎・氷・毒を際限なく吐き出す。迂闊に近寄れなくなった所へ魔法が炸裂、特に体力の少ないサポーターからバタバタと倒れだしたのだ。

「あらら、これはダメね、撤退すらムリそう。・・・仕方ない私がやります、ダーリン時ほど乗り気はしないのですけれど、目の前で

全滅されても寝覚め悪いですからね。ポーリは倒れたものの回収、私の邪魔にならないようにね」

「仰せのままに、剣姫さま。」

私は返事も聞かず（了承するのが分かりきっていたから）ミスリル製の剣をスラリと抜き、一気に駆け出す。

「邪魔です、道を開けなさい！」

キュバスオロチを50人も的人数で包囲しながらもはやバラバラになりつつある陣形がハッキリ見えてきた所で私は一喝した。

「ハアアア、ヤッ」

キュバスオロチの左から約10mという所まで間合いを詰めた私は、気合と共に剣を振り切る。

剣身から白光が衝撃と共に一番外側の首に激突、いとも簡単に切り飛ばし、更にもう一本内側の首半ばまで切り裂く。

ん、少し遠かったか。相手が大きすぎて間合いが若干掴みづらいわね。

さらに3m間合いが詰まった所で今度は下から上へ切り上げ、今度こそ二本目を切断する。

そこでキュバスオロチはようやく私の存在に気付いたようだ。途端に炎と毒のブレスが眼前に迫る。

当然それを交わすことも出来るけど、それをまた狙われる事になる、そんな後手は踏まない。

「ダッ」

剣を平打ちにし広範囲に衝撃波を撒き散らすことでブレスを無効化し、さらに2m間合いを詰める。

これで一足の間合いまで到達、後は始末するだけだ。

スキル：十斬光線Lv6（光属性、斬線に触れたモンスターは切り裂かれる、Lv以上のモンスターには効果無効）

たちまちキュバスオロチの体に銀光が無数走る。一呼吸十連斬、これで終了つと。

++++++
++++++

名称：ミラヴィルチエア 追跡の剣姫

ランク：A

力：80

体力：69

賢さ：62

器用さ：31

幸運：23

スキル：

1：愛する人の危機 心の底より愛する人の危機が感知出来る

2：飛剣光斬Lv6 剣先より光の衝撃波が発生する（飛距離はレベル×2m、Lv以上のモンスターには効果無効）

3：感謝魔吸 愛する人が心から感謝した時、周囲から魔力を吸収し魔水として貯めこむ事ができる

4：十斬光線Lv6 光属性、斬線に触れたモンスターは切り裂かれる（Lv以上のモンスターには効果無効）

魔法：

1：あなたの元へすぐ『我、片翼の元へ、繋がりし心、今』

愛する人の元へ瞬間移動する

2：姫の統括Lv7『私の詩に酔いなさい、刻の調べに狂いなさい、
さあ汝、全なる我に従うべし』

小型モンスターを従わせ自由に扱うことができる（自分より大型
のモンスターに無効、Lv以上のモンスターには効果無効）

第六話　「追跡の剣姫」の日常　その2（後書き）

スキルはランクアップすることに1つ覚えます。

Eランクから始まるのでDなら1つ、Aなら4つです。

ヒロインであるミルちゃんはユニークスキルや魔法を複数所有している稀有な子です。

フロアは12層ごとに適正ランクがアップします

1～12：E　13～24：D　25～36：C　37～48：B

49～：A

この辺りの細かい設定諸々は、そのうちまとめたものをアップする予定です（たぶん）

長くなった上に終わってないとは何事・・・

次回、イリア神登場、ポリー君のステータスも？

主人公は次々回から復帰予定

更新は書けた時に、ということ結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第七話　「追跡の剣姫」の日常　その3

「あゝあ、収穫はなしか。ま、明日はデートだし良いか、うふふ。」

「剣姫さまはホント物好きでございますね。」

「ふふん、羨ましのでしょ？」

「処置なし、でございますね。」

そんな、どうでもいい話をしながら私たちはホームへ戻ってきたわ。ああ、麗しの我が家・・・というほどの思い入れはないのだけれど。

「それでは、剣姫さま、ここで失礼させていただきます。」

「はい、ポーリ。お疲れ様。」

玄関口でポーリと別れた私は200人は暮らせる大きな屋敷の奥へと向かい、一際大きな扉の前にたどり着く。

「イリア、入るわよ。」

人の目がある場所ならイリア神とかイリア様と呼ぶ私だが、二人の時にイチイチそんな呼び方はしない。付き合いも長いしね。

「ミルかあ。おかえりー。」

扉の内から腑抜けた返事が返ってくる。

「またあ、そんな格好して。私以外に見られたらどうするのよ。」

イリアは基本部屋の中で裸である。まったくデーター閲覧時にはその方が共感あがるし楽しめるけど、普段からはただのロリ痴女よ。

「いいじゃん、この部屋に入ってくるのなんてミルくらいよ。それに私が痴女だっていうなら、そっちはモブしか愛せない変態じゃん？」

「う、うっさいわね。カリキをモブなんて呼ばないで。エデンの知性体はちゃんと生きてるんだから！それに彼はカッコいいのよ、ち

よつとバカなのも可愛いし。現実世界の男なんて、男なんて・・・」
イリアは処置なし、とばかりに肩を竦める。

「まあいいわ、その件は後でジツクリ話すとして、今日たまたま4
1層でフロアボスの討伐を受けたタツキファミリーって所と会った
んだけどね。イリア知ってる？」

「む、ちょっと待て・・・ああ、これか『水谷達樹』職業はタツ
キファミリーの神、ファミリーメンバーは54人、ファミリーラン
クB。こちらに来てまだ40年か、若い神の割には頑張ってるな。」
イリアの5柱神という肩書は伊達ではない。というかエデン内でマ
スター権限を持つのは5人のうちの1人。

「なるほどねえ、情報の価値が分かってないヒヨッコさんなのかな。
イリアから忠告しておいてよ。まだあなたのファミリーが上に上が
ってこれる段階じゃない、って。」

「ははあ、また助けたのかい、物好きだねえ。そんな事ばかりやつ
てるというか死ぬよ？」

「そうかもね。でもこっちに来てもう1万年経つけど・・・
現実世界に戻る気もないし、私”を”愛するマイダーリンもいるし、
そうそう死ぬ気はないわよ。ま、どうせ死ぬならこっちの世界で死
ぬつもりだけどね。」

チートだしね、そう言っただけでイリアにウインクしてみる。だけど、現
実世界からの友達であるイリアにあまり心配かけたくないのも確か
だ。

「あなたの覚悟にちゃんもん付ける気はないのだけど、ミル。ど
うせ大遠征に行かないでって言っても聞いてくれないのでしょ？」
「まあ・・・ね、なにせ60年ぶりの49層攻略戦よ、血が騒ぐつ
てもんだわ。こういう所は枯れないのが自分でも不思議だけど。」

そういつて苦笑する。戦う事、愛される事（思い込み）は何万年経ってもきつとやめられない。

「難攻不落の49層。過去の7度の遠征はことごとく敗退、幾多のプレーヤーと『人』が敗れた悪名高きフロアボス”チゴクアシユラ”、か。あれを退ければエンディングが見えるのかしらね。」
イリアが思い出すようにポツリとつぶやく。

ダンジョンは12層毎にランクが上がる、これは長い年月かけた検証の結果分かった事だ。その一つの目安がフロアボスである。

周期的にポップするフロアボスは、周辺のモンスターの魔石を食らってパワーアップする。フロア毎に魔石総量は一定だから無限に強くなる訳ではないが、長い年月放置されたフロアボスは、その層のモンスターを全て食らいつくした状態になってる。

つまり、ダンジョン発生以後、攻略されていないフロアボスは最強状態というわけ。

更に49層はBランク対象からAランク対象に変わる（と思われる）変わり目の層、有効Lvに到達してないスキルや魔法は無力化されてしまう。

人数揃えても戦力は半減、それが49層攻略の難易度を極限まで引き上げる原因。

「どうなんでしょうね。私は別にエンディングを求めてる訳じゃないから。ダンジョン無くなったらちよつと困るかも。」

「はは、それもそうかもね。あ、今度の大遠征は私も同行する事になったから。私が死なないように頑張つてよ”追跡の剣姫”様。」
ニヤツ？いえいえ、にやの方が似合いそうな笑みを浮かべるイリア。

「あら、そうなんだ。神様、しかも5柱神がモンスターにやられて消えるのを見るのもおつかもね。」

「なはは、やめてよ。あっちゃんがブチ切れちゃうわ。」

「はいはい。じゃ私は休ませてもらうわ。早く寝て明日のデートに備えなきゃ。」

冷めたイリアの視線を背中に受けつつ、それでも私は平然と自分の部屋に戻るのだった。

第七話　「追跡の剣姫」の日常　その3（後書き）

設定的な事に関しては、もう2つほど大きな物が残ってます。
しばらく生暖かい目で見て頂けると幸いです。

次回、ついにモブ認定された主人公ターン（？）

バカと変態ストーカー（美少女）のデートをお送りいたします

なぜ、登場人物が変態ばかりに・・・

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第八話　くテートじゃない、おごるのは食事のはずだ！

「はぁ・・・ふう、あぁ、はぁ」

「ちよつとカリキ、朝っぱらからその鬱陶しい上に勘違いしそうな溜息いい加減やめて欲しいんだけど。」

『そうだそうだ』

そう言われても勝手に出るものは仕方ないだろう。

「なんだなんだ、まゝた彼女の事で悩んでるのかい。恋煩かぁ、青春だねえ。ま、私も昨日は青春ハッスルしちゃったけど！ご馳走様でしたけど！」

どおりでチールが起きて来ないはずだぜ。

「で、もう剣姫は扉の前でお待ちじゃないのかな？こんな所で、ボーーーーと溜息ついてないで早く行った方がいいと思うな。」

うるさい、だから憂鬱なんだよ。

「そうそう、剣姫さまが自分からこのホームの扉にノック、なんてイベントは絶対起きないんだから、あんた責任とって早く行きなさいよ。鬱陶しいし。」

「注1：素早い行動を求めます。リーダーならとつと行け。」

・・・俺は大声援（？）背中押されるように、仕方なく待ち合わせ場所まで向かうことにした。

僅か3秒でも、そう思う事にした。

「行つてきます。」

「はぁい、おはようございますですわ。私”を”愛するマイダーリン。よく眠れました?」

ボタン

俺はドアを5?開けた所で閉めた。俺の思いは3秒すら無理だった。

「あああん、いけずですわ。」

お約束すぎる。許して欲しい。

しかし背中からは「早く行け」という凄まじいプレッシャーを感じる。

俺そんなに邪魔なのか?

・・・そこ!なぜ頷いてる?

俺は気を取りなお・・・

せないが、行くことにした。逝くことにした!

「はい、おはようございますですわ。私”を”愛するマイダーリン。よく眠れました?」

「ああ、まあな。いいか先に言っておくぞ。昼食と一緒に食べるだけだからな。自分で言い出したんだぞ、もちろん分かってるよな?」

「もちろん分かっておりますわ、マイダーリン。では、まずシヨッピングと洒落込みましょう。」

全く何も、全然全く分かってない口調だった。内容もだった。

「あ、でもでも、まずは中央広場で待ち合わせのイベントをこなさないですね。中央広場へゴーなのです。」

待ち合わせって、どうやってするもんだった?俺の常識的で正常な記憶とずいぶん違うのだが。

と、その時、おずおず、オドオドしながらそつと俺の手を握ってく

るミラヴィルチェア。

おい、ちよつと可愛いじゃないか。まあ顔は90点だしな。ちよつと顔を赤らめたり+3点してもいい。体で減点だけだな！

「では、ゴーゴー。」

ミラヴィルチェアは俺の手を支点に軽く持ち上げると（もちろん俺を）

「ちよ、ちよつと待て、痛い。マジ痛い。」

「15分の我慢です、マイダーリン。そしたら素晴らしい出会いがいえ待ち合わせが！」

出会いも待ち合わせもある訳がない。しかもちよつと可愛いとか思ってしまった自分を許せなくなった。どうしてくれる。

俺のお願いなど完璧無視して、鼻歌さえ歌いながらミラヴィルチェアは疾走する。

引きずられてる（厳密には浮いてる）俺は素晴らしい明日に向かって、はいないけどな。ああ、肩が痛い。

15分後、ミラヴィルチェアと引きずられた俺は中央広場に到着した。

そこでミラヴィルチェアは俺をポイッと放り出すと、そのまま疾走（失踪？）あつという間に姿が見えなくなった。

のはせいぜい10秒、気付いたら目の前にいた。

「はあい、私”を”愛するマイダーリン。お・ま・た・せ。」

こういう場合はどういうリアクションを取ればいいんだ？俺の理解力は3千光年ほど追いついてこない。今ふと思ったが『光年』ってなんだろうな？

「またあ、つれないダーリン。でもいいの、会えただけで嬉しいから。」

語尾に音符が付いてた？

何故だか寂寥感を感じふと空を見上げる。二つの太陽はどちらもまだ低い場所にある。そこから導き出される答えは、

昼食まで約4時間

ということ。早すぎやね

「では、ダーリン。約束通り今日一日デートしましょ。そのために時間はたーっっっぷり空けてきたのよ。うれしい？」

ニコリと首を傾けながらの上目使いが、モンスターのしぐさに見えるぜ。

「約束は食事をご馳走する事だ。それ以外はない。」

「じゃ、買い物へレッツゴー。」

何も聞いてやしない。

ここからは記憶があいまい（ということにしておいてくれ）なのでダイジェスト

まず洋服屋へ行った。とにかく高級で有名なスキル持ちが経営してる店だ。

高い、一般人には絶対買えない（俺だって買いたくない）値段の服を2着買わされた。

買うまでに2時間かった。俺の精神は死んだ。

支出＝3500ギルダ

何故か服を持たされつつ小物ショップへ行った。
以下略、かかった時間は1時間半、おなか減った

支出＝700ギルダ

あまりに疲れておなか減ったので早めに食事する事になった。
ミラヴィルチェアが予約していたらしい超超高級で有名な飲食店だ。
探索ファミリーのリーダーが会合する時にご用達の店。プライバシーへの配慮が抜群なのだが、飯は変態神様の方が断然美味い。
許して欲しい。

支出＝350ギルダ（1名様分）×2

ここで解散できると思ったら甘かった。帰らせてくれない。

路上で冷やかに来た愚者（むしろ勇者か）が居たが、肘の角でヘソの右辺りに穴を開けられていた。まあ街中だし死にはしないだろう。

・・・まあ、あれ、治療スキル持ちが近くにいない時は諦めて。
自業自得である。

ブラブラ露店を冷やかしながら歩いていると、当りが騒がしくなった。

周りの奴らにちょっと聞いて（脅して）みると、どうやら冒険者が珍しい動物をタイムしたので見せに来てるらしい。

俺は興味がなかったので去ろうとしたが無理だった。

小型だが火を吹く頭にドが付く生物で、確かに珍しい。絶滅危惧種で神様に保護されているはずでは？ミラヴィルチェアは大喜びだった。

た。

俺の髪の毛がちょっと焦げた事だけを報告しておく。

支出＝120ギルダ（俺は払いたくなかった）

ようやく二つの太陽が地平線へ沈もうとして、1番月月が顔を出し始めた頃に夕食になった。味なんて分からなかったと明記しておく。ヒリヒリする。俺は変態神様の飯が食いたい。

支出＝40ギルダ

更に外泊になった。これだけは断固拒否の態度を取ったさ。

しかし怪しい薬でハッスルさせられた上に干からびる寸前だったという事は、明記する事すら憚られる。

翌朝ファミリーの連中が大いに心配・・・していなかった。

なぜ内容までみんな知ってるんだ？死にたくなる。

昼まで寝て、俺は全てを忘れた。

記憶力操作には自信がある。なにも問題はない。

第八話　くテートじゃない、おごるのは食事のはずだーく（後書き）

おバカ主人公はあらかじめ前日収入のうち1万2千ギルダを持たされています。

みんなリーダーがどのくらい使われるかは承知の上なのです。

合掌

次回、第2章突入、新たな世界へ旅立ちます

あ、準備だけかも

ダンジョンは出てきません、バイな人は出てきます

今日中にアップ出来るかな・・・

自分はそうなのですが、一晩寝ると嫌な事ぐらい速攻忘れられます。
バカってお得だと思います（そういう問題か？）

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第一話　いざ、フィールドへ・・・って何？

「おー、ようやく起きたか。お疲れだったみたいだな。」

カルシュが声をかけてきたが、俺は何も覚えてない、覚ええない、覚えてないだつてば！だから何の事だか分らなかった。

「カリキ、みんなもちよつと話があるからリビングに集合してくれ。」

ボックスが集合をかける。

もう昼を過ぎてるのに、っは、そういえば朝も昼も食い損ねたじゃないか！！

「おーい、カーリーキー、よだれ出てるよ。」

「さっきの昼の残りがあるぜ、食うか？そうそう、俺のも一緒に食うといいらしいぜ。」

食わねえよ。あ、いや、俺のための残りの方は食うが。

「あー、カリキは食いながらでいい、聞いてくれ。と言ってもお前以外みんな知ってる事だが、まあ聞け。」

うむ、もう昼を過ぎてるのに、の後は、何で皆いるんだ、だったが話があったらしい。

先に言えればいいものを。

「まあ、不埒な事を考えてるバカに聞かせても仕方がないんだが、改めて聞け。昨日チールに装備作らせるために街へ買い出しに行った事は知ってるな？

あ？行ったんだよ！それはまあいい。しかしだ、魔石以外の素材がほとんど手に入らなかった。ケチった訳じゃないぞ、何やら大遠征が近いらしくてな、大手ファミリー装備用の素材をに買い漁った後

で空っぽだったわけだ。」

「ほーん、それは大変だ。大遠征、だーいえんせーい。楽しそうな名前だな。しかし聞いたことあるような気けど、誰だっけ？」
俺は友達以外の名前を覚えるのはちよつとだけ苦手なのだ。

「名前じゃねえ！」「名前じゃないよ。」「注1：名前と思う思考が信じられません。」
ハモってんじゃないぜ？

「ん”ん”ん。大遠征の事はまあいい。問題は素材が無いって事だ、装備そのものも高騰気味だからとても新しい装備を買うなんて真似は出来ない。」

バックスが力説する。どうでもいい事なら最初から言うなよな。混乱するだろ。

まあ俺は友達のことじゃないって最初からわかってたけどな。

「で、だ、神様とも相談した結果、フィールド狩りをしたいと思う。はい、そのリーダーカリキ君、フィールド狩りは分かるな？」

「もちろんだよ、バックス君。分からないはずがない」

えーと、なんだっけ？あ、ほらあれだよあれ。

「注1：ヒント、神様が同行します。」

あー、そうだそうだ、買い物の一種だな。うん。

「ヒント2、怪我すると痛いよ。」

喧嘩だ！間違いない。

「ヒント3、長期遠征になるんですよ。1週間ぐらい。」

んー、そういえば最近旅行に行ってなかったな。たまに行くのもし

いだろう。

「ダメだな」「ですね」「注1：終わってます」

「んだよ、人をバカにしゃがつてよー。誰か分かる奴いるの？」
なぜそこで全員ジト目で見る？え、みんな分かったの？

いや、カルシュは分かってないな。目で合図きたしな。同士だ

「それじゃ、カリキとカルシュは置いていくという方向で。」

「おい、待てや。リーダーは俺だぞ、俺が置いて行かれるとかおかしいだろ。」

ワイワイガヤガヤ

「もう話が進んでいけませんので、僕から説明しちゃいますよ。」

「おう！ポーリはいいやつだな！」

流石俺の弟子だ。うんうん

「注1：弟子では全然全くありません。」

「ラノタウルスを倒すまで、16層で戦うために僕が新しい装備を作るんです。魔石と鉱石は手に入りました。まあ買ったんですけど。しかし、ベースになる素材は全く手に入りませんでした。」

「うむ、それは分かったぜ。」

俺はひとつ頷いてみせる。

「そこでフィールド、つまり5柱神保護結界の外に狩りに行く必要が出てきました。必要なものは色々ありますが、一番の重要課題は

『恐竜種』の素材入手です。」

「おおおお、つまり恐竜狩りか。なんだなんだ、最初からそう言うてくれればこんなに悩まなくて済んだのによ。全くバツカスは人が悪いぜ。いやあ、しかし恐竜狩り、くー、燃えるねえ。」

滾ってきたー、俺の中の色々が迸るぜ！

「しかしです、保護結果の外、つまりフィールドは魔法が使えませんが、スキルも対モンスター用は効果がなくなります。とても危険な戦いになります。それと神様に同行して貰わなければ出る許可がありませんが、これは了承して頂きました。」

ポーリが神様に向かって頭を下げる。

「そりゃ、もうフィールドじゃ俺ら神は不死身だからね。まあ痛いけど。その痛みも中々おつなもんだし、あの食われる感触も何度か味わうと快感に・・・」

「注1：気持ち悪話はやめてください。グロい話も。」

顔を少し青くしながらボソツと呟くマーリッシュ。妖精族の彼女は怖い話が苦手だ。怪談話とかすると本気で泣き出すんだぜ。

後で呪われるけど、な！

「神様が変態の上にマゾだと言う事は分かりました。でも私の時はサドですね。」

「なんでも楽しむ、それが神」

「まあ確かに神だと思います、いろいろな意味で。関わりたくないって意味ですけどね。」

ベルサリアの氷の刃が次々と突き刺さる。効果はないけど。

「あゝ、もう、いいですか？僕とマーリッシュさんはまだフィールド狩り未経験なんです。あまり戦力にはなれないと思います。」

でも必要な素材はCランク指定の『恐竜種』なんですよ。みなさん本当に行くんですか？」

本気で心配そうなポーリ君。

「ダイジョブ大丈夫、リーダーの俺に任せておきなさい。」

こういう時こそ、リーダーとしての威厳と度量を示しておかんな。

「それじゃ、今から出発ってことで、いくぜー。」

・・・なぜ、みんなコケてるんだ？

というか俺、飯食ってなくね？はら減ったんだが

第一話　いざ、フィールドへ・・・って何？（後書き）

フィールドでは魔法が使えません。

ダンジョン内で魔法が効果を発揮するのは周囲の魔力を使っているからなので、外に出ると魔法は使えなくなるのです。

スキルは体内の魔力を使うので発動はしますが、モンスターの魔力器官に対して効果を発揮するタイプのスキルが多く、フィールドにいる生物に効果を及ぼしません。

フィールド専門に狩りを行なっている人々が冒険者です。

彼らは魔法やモンスター用のスキルを覚えない代わりに、友好的な生物（突然変異種）を飼い慣らし使役するタイムという技を会得します。

次回、マイファミリーはついに広大なフロンティア（フィールド）へ！

チートヒロイン（美少女）とダンジョンってなんでしたっけ？
変態神様、あんた出てきすぎ

ほぼノリで書いてます、色々申し訳ない。

更新は書けた時に、ということと結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258y/>

ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

2011年12月1日19時50分発行